

マーカス・バンクス 著
石黒広昭 監訳
『質的研究におけるビジュアルデータの
使用 —SAGE 質的研究キット5』

新曜社 2016年11月 A5判 224頁 ¥2592 (税込)

蓮見絵里

本書は、質的研究において写真や映画といったビジュアルデータを利用することにより何が可能となるのか、また研究の過程で何を考慮したらいいのか、豊富な研究紹介とともに論じられている。

本書は6章で構成されている。

第1章では、研究でビジュアルデータを利用する必要性として、著者は二つの理由を挙げている。一つ目は、私たちはイメージを日常的に利用しており、研究においても無視できないというものだ。二つ目は、イメージを用いた研究方法独自の社会的洞察がもたらされるというものだ。

第2章では、ビジュアルデータのなかで重要な位置を占める写真と映画について、それらを利用した人類学と社会学の調査の歴史を概観している。イメージを産出する技術や研究の理論の変化とともに研究が発展し、イメージ独自の表現や描写の可能性に着目したことが描かれている。

第3章では、既存のイメージにたいする分析的・方法論的アプローチを概説している。イメージに何が描かれるのかといった内容だけではなく、誰がいつイメージを作成したのか、あるいはイメージがどこに飾られるのかといったイメージの物質的特性に目を向けることが提起されている。

第4章では、研究協力者がイメージについて考えたり、調査者がイメージを作成したりするといった、フィールドワークを通してイメージを用いたり作る際の手法と分析について論じられている。写真・映画誘発法として研究協力者が見るイメージは既に人々の生活と結びついてきたものであり、イメージがどのように撮影され、保存され、選択されたのか、インタビューなどの調査に影響を与えることを考慮する必要がある。また研究者がイメージを制作することが、記録にとどまら

ず、研究者自身に内省を促す探索的なものであるとされる。さらに、調査者と研究協力者が、協働可能な調査課題を設定し、ビジュアルデータを用いる手法も描かれている。研究協力者が撮影により主導的に関与するといった協働は、研究者への内省を促したり、研究協力者の政治的な活動の一部となったり、それを通じたアイデンティティの作り替えに関する洞察を生む。

第5章では、視覚に重きを置いたプレゼンテーションの方法が示されている。プレゼンテーションでは、視聴者が社会的・文化的理解を持ち込みイメージを読み取ることを考慮し、目的に合わせイメージやキャプション等を効果的に配置することが求められる。また、研究協力者へのプレゼンテーションは、研究者に新たな気づきを与え、研究協力者たちの活動のあり方にも影響を与えるものである。さらに、イメージのデジタル化により可能となったマルチメディアでのプレゼンテーションの可能性について詳細に描かれている。マルチメディアにより、音声、テキスト、動画に相互にリンクがつけられ、視聴者は中断したりリンクに飛ぶことで、分析の妥当性を確かめたり別の分析も可能となる。

第6章では、これまでの議論のまとめとして、ビジュアルデータを用いる手法の有用性が論じられる。ビジュアルデータを用いた調査は、研究協力者の視覚的な構成を学ぶことを可能にし、それは研究者に発見をもたらす。また、ビジュアルデータを用いた調査では、イメージから呼び起こされる意味は常に唯一のものであり、それを詳細に記述することが試みられる。このことは、調査者が当然視するカテゴリーを再考させる機会も同時にもたらすものである。

研究で用いられるイメージは、制作され利用される過程で様々な意味を持ち、人との新たな関係を作り出し、独自の表現の可能性を持つ媒体であり、研究プロセスのあらゆる箇所に影響をもたらすことに気づかされる。本書は研究において、ビジュアルデータを反省的に効果的にそして創造的に用いる際の視点を与えてくれる。